

「インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学教育学部 肥爪聡子

私は以下二つの目標を持って本プログラムに参加しました。そこで本報告書では、これら二つの目標に関して、成果及び成果をもたらしたプログラム内容について述べます。

【目標】

- ・多文化共生社会について学ぶこと
- ・日常会話程度のインドネシア語を習得すること

【多文化共生社会について学ぶこと】

本プログラムにおいて、個人、社会双方の観点から多文化共生社会について考えることができ、その理解が深まりました。

個人の観点については、インドネシア大学の学生との交流の中で、「多文化共生社会、インドネシア」に対する考えを聞くことができました。彼らの立場は、多文化の中で多数派に属する者、少数派に属する者などそれぞれに異なっていました。多様な彼らとの交流の中で、私個人として、ある考えの傾向に気付かされました。それは、多数派は現在のインドネシアの多文化共生社会に満足している一方、少数派は満足していないという傾向です。例えば、インドネシア大学内にはモスクはありますが、教会や寺院は存在しません。そういった現状について、少数派に属する学生の多くは疑問を抱いていました。

社会の観点については、インドネシア社会に関する講義の中で学ぶことができました。講義内では、多数派の少数派に対する誹謗中傷、またそれに対する反対運動などが取り上げられ、社会全体として多文化共生社会特有の多くの問題を有していることが分かりました。

このような学びは、私の今までのインドネシアに対する考えを大きく変えました。プログラム参加以前、私はインドネシアに対して、多文化共生社会がうまく機能している国という印象を抱いていました。しかしながら実際には、多文化共生社会特有の多くの課題を抱えていると気付かされました。

【日常会話程度のインドネシア語を習得すること】

本プログラムにおいて、日常生活に全く支障の出ない程度にインドネシア語を習得することはできませんでした。しかしながら、プログラム参加以前インドネシア語を学んだことがなかったことに鑑みれば、その語学力を多いに向上させることができました。それを支えたのは、本プログラムの持つ二つの特徴です。

一つ目に、「学んだことをすぐに使える環境」です。プログラム期間中、私達は午前中に語学の授業を受け、午後にインドネシア大学日本語学科の学生との交流を行いました。その結果、午前中に学んだことを、すぐに午後に使える環境が整いました。その環境は「学んだことを使う→通じて嬉しい→語学学習のモチベーションが上がる→また新しいことを学ぶ」という好循環を生み出し、効果的なインドネシア語学習を可能にしました。

二つ目に、「体系立てられた授業」です。一例を挙げれば、私達は数字表現を学んだ次の日に、価格表現を学びました。このように、前の授業で学んだことを次の授業で活かすことができるという体系が整っていたために、スムーズにインドネシア語の学習を行うことができました。単語に関しても、

前の授業で学んだ単語を次の授業で使用するという体系があったため、またインドネシア語によるインドネシア語の授業で既習の単語に触れる機会が多かったため、授業の中で自然と単語を復習、習得することができました。

【おわりに】

本プログラムにおいて、多文化共生社会について理解を深め、またインドネシア語の語学力を向上させることができました。今後はこれらの経験を活かし、多文化共生社会やインドネシア語について更に学習を進めたいと考えています。